

カルカッタの空の下

酒井 結希 (さかい ゆき)

東京電機大学 未来科学部 建築学科



無邪気な子供に手を引かれ、たどり着いた先は世代をも越えた一族が集まって暮らす習慣だった。インド、カルカッタで出会った貧しくも豊かに暮らす人々。近年、急速なニュータウン化により高層マンションが建ち並びはじめた。ここに地上から切り離された高層のイエではなく、路地空間の続く人と人とが密接につながる土着な生活空間を考える。床、壁、天井に分解し、囲う割合の異なる壁の作る空間の連続を床、天井がつなぐシステムを考える。閉じた場所は存在しない。ドアも窓も建具もない。スラブはレベルを変えながらリズムをつくり関係や視線を繋ぐ。これはインドのあったかい気候とそこにある土着な生活が生んだ大きなイエ。ここにある空間が人をつなげ、人と人を結ぶ。



講評

世界中を旅したという作者が強く印象に残るカルカッタに場所を定めた。近代化されつつある街中の余白のような場に人と人をつなぐ、連続的で開放的な住居をつくる提案だ。空間を床と壁、天井に分割、数段階の開閉率の異なる壁面をある法則のもとに操作しながらも流れるような豊かな空間をつくるというコンセプトは魅力的な模型と合わせ十分に表現されている。

構造や工法を考慮しても現実的でありながら陳腐さはなく、施工精度など望むべくもないに近い建て方でも魅力は変わらないのではとも思う。強い日差しのインドにあってこそその形態でもある。

身近な問題意識をテーマとしてとらえることが評価される傾向の中、カルカッタというピンポイントの場をあえて強調することが日常から遠い印象を与えてしまったかもしれない。ユニットの秩序ある構成の説明に加えて、より人間に近いスケールでの説得力のある表現、地域性、素材感などが補完されればよりよい提案となったのではないだろうか。

しかし、作者の明るさと相まって、すがすがしい印象に残る作品であることは間違いない。

(審査委員：神成 健)